

GF

ジェンダーフォーラム
通信

GENDER FORUM PRESS

女とは？ 男とは？ 考えるマガジン

和光大学

ジェンダーフォーラム 〒195-8585 東京都町田市金井町2160 和光大学ジェンダーフリースペース(G112) TEL 044-989-7777 内線4112 gen-free@wako.ac.jp

GF EVENT

市民講座

内田雅克さん講演会「『日本男児』の構築—少年を兵士にする—」

2015年6月20日（土）、内田雅克さん（東北芸術工科大学芸術学部教養教育センター教授）を招いて市民講座「『日本男児』の構築—少年を兵士にする—」が開かれました。

内田さんは、日清戦争からアジア・太平洋戦争にかけて「男らしさ」がどのように定義され、操作され、変容していったのかを、明治以降の三種類の少年雑誌を素材にして明らかにしました。少年雑誌は社会の風潮や時代の空気感を敏感に読み取って様々な情報を提供していくわけですが、結果的に少年雑誌が果たした役割は「男ならこうあるべきだ」というメッセージを少年たちに送り届けることであり、実際にそれを読んだ少年たちは軍人としての「男らしさ」を内面化していきます。

内田さんのジェンダー史研究を何よりも特徴づけているのは、「ウィークネス・フォビア」という概念です。少年たちは「あいつは弱い」「あいつは女々しい」と言われることを恐れています。なぜなら「軟弱」で「女みたい」な男は攻撃される理由となるからです。この「『弱』に対する嫌悪と『弱』と判定されてはならないという脅迫観念」を、内田さんは「ウィークネス・フォビア」と呼んでいます。そして

ウィークネス・フォビアは「男らしさ」を支えるものであり、その存在を暴くことが「男らしさ」の脱構築の鍵になるのではないかと主張されていました。

【交流会】講座終了後の交流会では、内田さんから研究の将来展望や大学での授業実践などを語っていただきました。その後、自由な質疑応答の時間に入り、参加者からは多くの質問や発言が飛び出しました。以下、主に話題になった内容です。①日露戦争のあたりから「日本男子」は西洋をモデルにした「男らしさ」を脱ぎ捨て、「壮士」像に似た「質実剛健」で力士型の「男らしさ」を表出していくのですが、これは江戸時代の「武士」像と関連があるのでしょうか？ ②「男らしさ」とは合理的・論理的な思考ができることだと言われてきましたが、一方では合理的思考だけでは割り切れない男性像が戦後の日本で表出されるようになりました。例えばアニメにおいて、負けるとわかっている戦いに積極的に身を投じる男性キャラクターの登場です。このような男性像の称揚は、どう解釈すべきでしょうか？ 内田さんからは上記の質問に対して、今後の研究対象に加えてみたいとのコメン



▲内田雅克さんの講演風景



▲GFSでの交流会

トをいただきました。この日の市民講座および交流会は盛況のうちに終わりました。（I.Y.・GF読書会メンバー）



▲内田雅克さんの著作
『大日本帝国の「少年」と「男性性」
—少年少女雑誌に見る「ウィーク
ネス・フォビア」—』（2010年6月、
明石書店）

GF EVENT

映画『レッドマリア』上映会&講演会

【上映会】『レッドマリア～それでも女は生きていく～』

日時：2015年5月9日（土曜日）

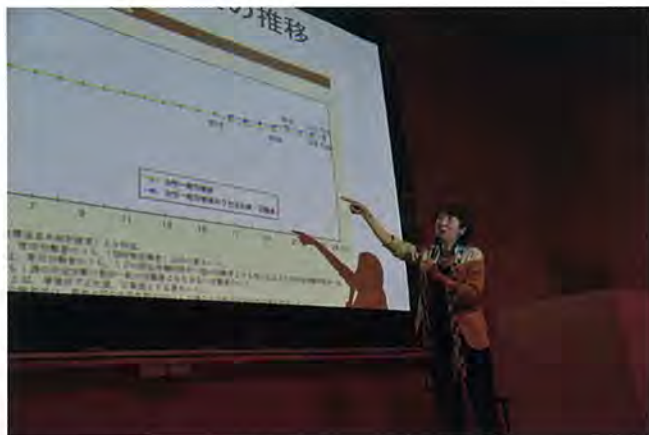
【講演会】『生を支える労働を見えるものに

～「レッドマリア」と家事ハラをつなぐもの～』

講師：竹信三恵子（和光大学現代人間学部）

日時：2015年5月16日（土曜日）

『レッドマリア』は、グローバリズムと高度資本主義の中で社会の周辺部に追いやられながらも、たくましく生きるアジアの女性たちの姿を、ときに寄り添い、ときには共に怒り、ときには涙しながら見つめた映画です。講演会では、竹信先生が、映画の解説をしつつ、労働とジェンダーに関して講義してくださいました。



▲講演会のような様子

COLUMN

『レッドマリア』と女性の「痛み」

「痛っ!」。映画『レッドマリア』で、大量の洗い物を前に、ジェナリンさんが咬いていた。ジェナリンさんは、フィリピン出身。韓国人の夫と共に韓国に暮らしている。家族で里帰りし、テレビ電話で故郷の人々と話すこともある。とても幸せそうに見えるが、ジェナリンさんは身体が痛いみたい。家業は農業だ。一日中働きすぎかもしれない。実は、私も身体が痛い。もしやこの痛みは、家事労働を引き受ける人の職業病かもしれない。

ホームレスのいちむらさんは、生理用ナプキンを手作りしていた。これは「いちむら流」生活術のひとつだ。実のところ、私は生理用ナプキンにひどくかぶれる。悩みはしてきたが、手作りしたことはなかった。「ナプキンなんて買えばいい」と考えがちだが、本当はもっと向き合うべき必需品である。ただお仕着せのものを買うのではなく、自分にあったものを考えることも大切な身体に対するケアだ。

また、布製ナプキンを根気よく一針一針刺していくいちむらさんの姿を見て、私はかつて自ら制作したテキスタイル作品を思い出した（写真）。編み手は、私であり、女性である。しかもその「手」は、血がにじんでいる。なぜなのか、いつからか、わからないが、布や糸の仕事は、女の仕事だ。ここで、いちむらさんと編み物をする主体は象徴的に重なり合う。いちむらさんがナプキンを作る光景に女性性を強く感じたのは私だけではないだろう。作品が示すように、私は昔からその女性性に「血＝痛み」を感じていたのだった。

女性という身体も、周知のように、常に「痛み」を伴っている。生理は結構「痛い」。痛くて体が伸びない。治まるまではお腹を抑え込む。どうして毎月こうも痛いのか。そして生理の先には妊娠出産がある。しかし出産の痛みたるや比較の対象など持たない。私も経験したが、すさまじい痛みだ。女性という性は人生を通して「痛み」と付き合う性だと言ってしまおうと言いきるか。映画



▲阿野理香『編み物をする手』
（原毛縮絨加工作品）2012年製作

の最後に女性たちが自分のお腹を出して見せていたが、なぜ「お腹」なのか、少しわかったような気がした。

この映画は「働く女」を描いた映画だ。そして自分の境遇と重なる場面がたくさん出てくる。決して他人事の物語ではない。しかし、みんな頑張っているけれど、報われない。働く必要があるのに、責任のないことで解雇される。自らに落度のないことで苦しみ、翻弄される女性たち。大切にされない女性たちの心は、とても痛くて、苦しいはずだ。

私は、「女って痛いな」と思ってきた。そして日頃、身体に「痛み」を抱えているからか、何となく生活が息苦しい。あちこちの「痛み」が胸の奥にも染みているのか。しかし、この息苦しさは私が至らないからなのだろうか？ いや、竹信先生が講演会で喝破したように、女性の生きづらさは社会構造の問題だ。この映画は「こんな絶対におかしい！」と必死に声を上げる女性たちの姿を映すと同時に、彼女たちへの反発や、白眼視する様子をも描き出していた。映画を観ながら、心の痛みが疼いた。

「女って痛い」なんて主張するのは私だけかもしれないと思っていた。しかし『レッドマリア』からは、女性たちが「痛み」を抱えることが伝わってきた。ならば、どうすれば、「痛み」をいくらかでも和らげ、人として充実した生涯を送れるのか。それを考え行動することが、私やみんなの課題であるように感じた。（阿野理香・ジェンダーフォーラムスタッフ）

BOOK REVIEW

井上輝子監修『田中寿美子の足跡 —20世紀を駆け抜けたフェミニスト—』 アイ女性会議、2015年、271頁、定価1500円+税

本書は、戦後日本を代表するフェミニストの政治家であり、社会評論家であった田中寿美子（1909-1995）の足跡をたどった書である。

田中は、1955年に労働省婦人少年局婦人課長を退職した後、フェミニズムの思想家・評論家として、多数の著書を刊行した。1962年には、山川菊栄とともに婦人問題懇話会を設立したほか、日本婦人会議結成に参画し、さらに1965年に参議院議員に当選した後は、国会の内外で、社会問題、女性問題の解決、平和運動に尽力した。1980年には、女性初の社会党副委員長に就任するなど、日本の女性たちの地位向上と政治参画推進に貢献した。

田中寿美子は、戦後、特に1950年代から1980年代の日本

の女性政策決定過程やフェミニズム運動を語る上で、欠かせない人物であるが、田中の人生や活動に関する研究は少なく、資料収集もほとんどなされていない。これを残念に思った私たちは、2012年に「田中寿美子さんの足跡をたどる会」を立ち上げ、田中の著作物、国会議事録、新聞記事、写

真や手書きメモなどを収集したほか、近親者や秘書、その他関係者たちにヒアリングし、田中没後20年に当たる今年、ようやく1冊の本にまとめた。

本書では、田中寿美子の生い立ちから、結婚・子育て、労働省婦人少年局時代、評論家活動、社会党参議院議員としての活動のほか、研究者としての活動も含めて、田中の一生の歩みをたどった。田中寿美子の政治活動（公害問題、「売春」問題、「国連婦人の十年」、男女雇用平等法案などへの取り組み）と、文筆活動（フェミニズム論、母系社会研究、反植民地運動など）を記したほか、「田中寿美子万華鏡」と題して、家族、秘書、社会党関係者、友人たちなどによる、多面的な田中像も紹介した。略年譜、著作目録、雑誌・新聞記事目録、田中の参議院での発言一覧から成る資料編も充実している。

田中寿美子のことを知らなかった人も、ぜひ本書を読んで、田中寿美子の魅力を堪能してほしい。（井上輝子・本学名誉教授）

GF EVENT

GF読書会の輪読と映画鑑賞

本年度前期読書会では、松井久子編『何を怖れる—フェミニズムを生きた女たち』（2014年、岩波書店）を読みました。この本は、映画『何を怖れる』を活字にしたものであることから、まずは映画を鑑賞しました。12人のフェミニスト達のインタビューを映像で見た後、出演されていた井上輝子先生ご本人からの生解説をいただきました（なんと贅沢な!）。「やりにくいわね…」とおっしゃりつつも、生い立ちからウィメンズ・スタディーズとの出会い、日常経験と女性学との関係などをお話いただきました。そして、読書会メンバーは一人ずつ担当を決め、樋口恵子さん、中西豊子さ

ん、高里鈴代さん、池田理恵子さん、上野千鶴子さん、田中美津さんについてレポートを行いました。

そのなかで、婦人問題懇話会、日本女性学研究会、基地・軍隊を許さない行動する女たちの会、WANといった諸団体の創設に至る経緯や活動の内容、NHKの番組改変裁判

のことなど、読書会メンバーのレポートにより、女性を取り巻く様々な問題点を可視化し、闘っていくフェミニストたちの姿をよりリアルに浮き彫りにしました。

映画を見て、活字化された本を読むことで得た情報に、同じ情報を共有しているメンバー一人ひとりが持っている知識や情報、経験、感想などが加えられ、一冊の本から2倍、3倍、いや何十倍もの豊かな読書経験ができたように思いました。これが読書会に参加する醍醐味なのでしょう。GF読書会に参加して1年になりますが、「読書会」おススメです。

(下野道代・GF読書会メンバー)



▲読書会メンバーが集う懇親会
(撮影：阿野理香・ジェンダーフォーラムスタッフ)

GF SCHEDULE

GFのイベントと読書会のお知らせ

2015年度公開講座

①映画上映会 & トーク

映画上映：『何を怖れる～フェミニズムを生きた女たち～』

トークゲスト：井上輝子さん（和光大学名誉教授）

日時：11月7日（土）13:30～16:45（13:00開場）

場所：和光大学（J204教室）

②市民講座『これって、デートDV?』

（町田市男女平等推進センターとの共催）

講師：深沢素子さん（アウェア認定ファシリテーター）

日時：11月19日（木・5限）16:20～17:50

場所：和光大学（D204教室）

③映画上映 & トーク

（共通教養科目「文化とメディアの社会学B」との共催）

映画上映：『メトロレディーブルース～東京メトロ売店・非正規女性のたたかい～』

トークゲスト：松原明監督・当事者

日時：12月9日（水・2限）10:40～12:10

場所：和光大学（D204教室）

④2015年度 卒業論文発表会

日時：1月20日（水・4-5限）14:40～

場所：和光大学（ジェンダーフリースペース）

*公開講座は、どなたでも参加できます。参加費無料。

GF読書会

日時：9月29日から、原則として、毎週火曜日13:00-15:00

場所：和光大学ジェンダーフリースペース

2015年度後期は、①山川菊栄『おんな二代の記』と、②高群逸枝『火の国の女の日記』を輪読します。どちらも複数の出版社から刊行されていますので、各自入手できたテキストをお持ちください。

*GF読書会は、学内外を問わず、どなたでも参加できます。ただし、参加に当たっては、いくつかのお願いをする場合がございます。

*ジェンダーフォーラムの活動に関すること、GF読書会に関することの問い合わせ先：和光大学ジェンダーフォーラム gen-free@wako.ac.jp（阿野）